

一月十八日 日曜日

休養。午後研究室に出て雑用。ついでに本を何冊か持ち帰る。

沢木耕太郎「路上の視野」何でこの本が研究室にあったのか忘れた。パラパラと拾い読みしていたら「記憶を読む職人」向田邦子の一文があつて、仰天した。何故仰天したかと言つたら、才あるモノ書きの直覚に震える様な思いを味わつたからだ。この小文は「父の詫び状」の解説文として書かれたもので、谷沢永一や山本夏彦の向田邦子評価を職人のすぐれた芸を認める観点ではないかと、今では平凡極まる感想を述べているのだが、たまたま、この解説を書いている最中に向田邦子の死を知り、沢木の文章は急転する。彼は解説文に引用した向田の文章のいずれも暗いのに気がつく。「消しゴム」「ねずみ花火」「隣の神様」といったものの暗さである。そしてその解説文（八一年の十二月）をこうしめくくっている。

「だが、もしかしたら、向田邦子のエッセイには、そのユーモアの影にそれほど多くの死がちりばめられていた、ということなのかもしれないのだが・・・。」

昨年の暮れだったか、向田邦子の妹さんの書いた本「姉の恋文」だったか忘れたが、それを原作にしたＴＶドラマを見た。それで向田邦子が恋人を自殺で失っていた事を初めて知った。二〇数年封印されていた秘密が上品にさらされていた。しかし、その事自体は、作家になる様な人物には良くあることであろう。

私が驚いたのは、恐らく向田邦子の本質的な暗さの核であったかも知れぬ「多くの死」を沢木耕太郎が二〇年以上も昔にかぎ取っていたということなのだ。沢木は向田の本の解説文を書きながら、いきなり向田の死に遭遇する。そしてその衝撃を力にして、向田の秘密の中核に辿り着いていたのだ。ノンフィクション・ライターの直覚はときに、これも又現実を超えてゆくものだ。この沢木の昔の小解説文は私には長編小説よりも面白く、しかも、少々恐ろしいものであった。こういうことの積み重ねが歴史になるのだ。私にはこんな直覚はないのが、最近ますます知れてきたのが、辛いね。

今日は完全休養の日であつたが、この小文に出会えた事が収穫であつた。人間にも時間にも、場所にも時に魔物が棲んでいる。それが、砂をかむ日常に光をもたらすのだ。

一月十九日

深夜というより早朝か、三時半頃眼がさめた。二階でガヤガヤと声が出ている。何だ何だと降りてみれば、なんと淡路の山田脩二がいるではないか。元ダムダンの鈴木を連れてくる。酔つて例によつて山田脩二風に自由勝手にやっている。

流石に参つたナアと思つては見たが、山田なんだから仕方ない。酒持つてこいと叫ぶので、百年の孤独を出せば、アア言う、水を出せばコー言うので、こちらは酒も飲めず、往生したが、山田なんだから仕方ない。家内も附合、雄大、友美も少し附合、妙な時間を過した。こういう附合は今では化石みたいなものになっているのは承知だが、山田なんだから仕方ないのである。幸いにして、今朝は早朝の沖縄便なので、と知らせると、五時頃アツサリ退散して行った。バカヤロー、でも山田脩二なんだから仕方

ないのだ。私も家内も苦笑いで、予定より早く六時前に世田谷村を出る。家内の運転でまだ真暗ななかを羽田へ。全く、まだ化石みたいな人間が生きているんだ。佐藤健が亡くなって、化石を一つ確実に失ったが、まだ残っていたんだなあ。七時にまだ、だいぶ間がある時間に羽田に着いてしまう。アト、二時間は眠れたのに、でも山田なんだから仕方ないのである。何か喰べようか。

今、九時半くらい。知らぬ間に飛行機は雲の上に浮いている。ANA二一九便は八時〇五分発だから、眠っているうちに飛び立ったのだ。今週は休む間もないくらいのスケジュールになっているが、こういう時程寸暇を惜しんで遊ばなくてはならない。十一時那覇空港着。国建の照屋君、課長と共に迎えて下さる。すぐ大宜味村へ。途中名護市では桜の花が咲いていた。色の濃い桜だ。大宜味村で島袋義久村長以下、助役宮城重徳氏等にお目にかかる。企画財務課の東参事、名護市役所の比嘉氏、北部広域事務所の方々と二時間程の打ち合わせ。その後、大宜味村の幾つかの施設を見て、海を埋め立てた計画地を視て那覇に向かう。ハーバービューホテルにチェックイン。国建スタッフと少々打ちあわせ。照屋君と食事に出る。二十二時四十分ホテルに戻る。いよいよ沖縄での生命と共同体をテーマとしたプロジェクトが始まる。

研究室のホームページの改良がまだ上手くいっていない。丹羽君に頑張ってもらわなくては。もう少し具体的な指示が出来るの良いのだが、その時間がない。

スケッチブックと色鉛筆は持ってきているのに、それを取り出すゆとりが無い。体力不足なんだろう、ゆとりをまだ作り出せないのだ。